



♪1章目 下校中に腹痛に襲われる恐怖……！

♪2章目 スクール水着で大決壊！

♪3章目 変態性癖への目覚め

♪4章目 もこりっ、膨らむブルマ

♪5章目 教室でおもらし

♪6章目 初めての紙おむつ

♪エピローグ 初めてののおむつ登校

♪あとがき

## ♪ 体験版 スクール水着で大決壊！

ぶりっ、ぶりりっ！

下痢を漏らしながら――、  
ミリーの身体にある変化が現れていた。

それは下校中にうんちを漏らしてしまったときに無意識のうちに  
感じていたもの……。

それは、快感だった。

下痢を漏らしてスッキリしてしまっているというのもあるのだろ  
う。

しかしその下痢が美丘を愛撫し、クレヴァスへと食い込んでい  
き、更にはお尻を包み込むようにして抱擁してきている。

その感触に、まだ男を知らぬミリーの身体は熱く発情してしまっ  
ていたのだ。

「ダメッ!! んあっ、あっ、はううっ！ おまた、ムズムズして…  
…っ、おっぱい、ジンジンしてきちゃって……うう～！」

ぶりゅっぶばっ！

びちちちちちちち！

ミリーは気づいていない。

茶色いマグマに蹂躪されているクリトリスが包皮を脱ぎ去って固  
く勃起していることに。

乳首が硬くシコリ、ツンと上向いて勃起していることに。



「はぁ……っ、はぁ……っ、はぁぁ……っ」

ビチビチビチッ！

ブリュリュッ！ ブボボッ！

お腹に力を入れすぎて、頭がボーッとする。  
それに波の音よりも、耳鳴りの方が大きくなっている。

ぶぼっ、

ボコボコボコ……っ

一際大きなおならが気泡となって水面に弾けると、ミリーを襲っていた腹痛は、やっとのことで治まってくれた。

「はぁ、はぁ…… あぁぁ……。お、終わって……くれた……？」

お腹は落ち着きを取り戻してくれたけど……、だけどまだちょっとだけ残っている感じがする。

もうここまで漏らしてしまったら我慢しても無駄なのだ。

ミリーは頬を赤らめてお腹に力をこめると、

「んっ、うううっ！」

ブリブリブリ！

最後の仕上げと言わんばかりにミリーは下痢を放つ。

スクール水着のお尻の部分がうっすらと膨らみ、足口から軟便が押し出されて海水に漂っていった。

「はぁ……、はぁ……、はぁ……」

——楽に、なってしまった——。

水着を脱ぐこともできず、二週間分の毒素を放ってしまった。

もうおまたもお尻も、背中までもがパンパンに膨らんでいる。

海水はひんやりと冷たいのに、うんちが詰まっているところだけがマグマのように熱くなっていた。

「あぁぁ……。全部、出ちゃった……。出しちゃった、よぉ……。お尻、重たくなって……。こんなに詰まっていたなんて……」

とにかくいまは、一刻も早くこの水着を誰にも見つからずに綺麗にしなければならない。

ミリーは周囲を見回すと……。ちょっと離れたところに岩場があって、ちょうど授業を受けている生徒たちからは死角になっているようだった。

まずはその岩場を目指して歩き始めようとするが——。

チリリッ、

「ひうう!？」

股間から発せられる甘美な微弱電流に、ミリーは頬を赤らめてしまう。

反射的にへっぴり腰になると、突き出されたお尻から、

**ブボボッ！**

空気と下痢が混じり合ったものが噴き出してきて、最後のトドメと言わんばかりにうっすらとヒップラインを盛り上がらせていった。……全部出し切ったと思ったのに、まだ残っていたらしい。

だけどいまはそれよりも重要なことは――。

「うそ……、おまた、気持ちよくなっちゃってる、の……？」

なぜ？

うんちを漏らして気持ち悪いはずなのに。

それなのに、なんでおまたがジンジンして、熱くなっているのだろうか？

「た、たしかにうんち漏らしてスッキリしてるけど……っ、でもっ、でもでもでもっ、おまたがジンジンするなんて……っ、あっ、ヒィ……っ、おっぱいも……ジンジンしてる……!？」

意識しはじめると、おまただけではなくおっぱいまでもジンジンして熱くなってきてしまう。ミリーの意思とは無関係に。

こんなの絶対におかしいのに……、  
と思いながらも、しかし心のどこかで理解しているもの事実。

「うんち……ネットリしてて、おまたもお尻も熱くなって……、それにお腹もスッキリして……」

ジンジンと痺れる股間とおっぱいを我慢しながらも、みんなから死角になっている岩場へとなんとか辿り着く。

磯になっているところまでやってくると、ホッと、ため息をつく。

どうやら誰にも勘づかれてはいないようだ。  
早く水着を綺麗に洗わないと――。

「ううっ、あんまり見たくないけど、脱がないと、ダメ、だよね……水着」

恐る恐る、スクール水着の肩にかかっている紐に指をかけると、ゆっくりと降ろしていく。

この水着を脱ぐということは、自分の失敗と向き合うということでもある。

二週間分の毒素を放ってしまった、この水着に詰まった失敗を。

「見たくない……、見たくないけど……っ」

もわわ……。



べちょ、べちょちょっ！

思い切って水着を一気に降ろしていくと、いままでミリーが嗅いだきたどんな悪臭よりも醜悪な芳香が立ち昇り、水着に詰まっていた茶色いヘドロが磯へと落ちていく。

「おまたもお尻も……うんちでべちょべちょするし……。早く綺麗にしないと……っ」

べちょっ、  
ぼとっ、ぼととっ。

スクール水着をひっくり返して、うんちを海に落とすしていく。下痢は背中の方にまで広がっていて、固いうんちはお尻のところでボーリング玉のように丸く収まっている。

「メッシュに付いたうんち、うー、綺麗にならないし……っ」

スクール水着のおまたやおっぱいがあたる裏地には白いメッシュが張られている。

そのメッシュはゴシゴシと海水で洗ってもなかなか綺麗になってくれそうにはなかった。

それでも意地になって擦っていくと、ちょっとずつだけど茶色く染まったメッシュは元の白に戻ってくれる。

「水着はこれでよし、と。あとはおまた……んん！」

冷たい海水を手ですくいにとって、下痢がこびりついたおまたに指を食い込ませ……そのときだった。

忘れかけていた微弱電流が、股間から発せられたのだ。

「おまた、気持ちよくなってるなんて……。うんち漏らして気持ちよくなるはずなんか……！」

認めたくないと思いつつもおまたを綺麗にしていく。

露わになったのは――。

赤ん坊のような、無毛のクレヴァスだった。

クレヴァスからはみ出しているのはショッキングピンクの蕾。

「うそ……。こんなに火照ってるなんて」

染み一つ無いマシュマロのような恥丘は、官能にうっすらと桃に色づき、熱い蜜を滴らせているではないか。

それは乳房にも同じことがいえた。

「おっばい、ムズムズすると思ったら……ひゅっ、固くなってるし……なんでよ……っ」

認めたくないと思いつつもピンクの頂に触れると、ムズっとしたなんともいえない電気信号が生み出される。

その感覚の正体を、ミリーは知っていた。

だけど、それは同時に認めたくないことでもある。少なくとも、  
理性では。

それでも……、身体は正直だった。

「はぁ……でも、スッキリした……。凄く……気持ちよかった……  
って、えっ？」

口走ってしまってから、ミリーは我に返る。

気持ちよかった？

うんちを漏らしてしまったというのに、気持ちよかった？

そんなの絶対におかしいのに。

おもしろしが気持ちいいだなんて……。

「気持ちよくなんか、ないんだから」

ミリーは官能に疼く身体をごまかすように、綺麗に洗ったスクール  
水着に身を包んでいく。

しかしキュッと股布に縦筋が浮き上がると、

「うっ」

低い声を上げて、腰を後ろに引いてしまう。

その様子はミリー自身は自覚していなくても、どこかセクシーな  
ポーズにみえた。

おまたもジンジンするし、乳首も硬くなってジンジンする。  
スクール水着の上からでも、乳首がツーンと硬くしこっているの  
が分かってしまうほどに。

「気持ちよくなんか……ないんだから」

ミリーは呟くと、岩場の陰から出てクラスのみんながいるビーチ  
へと歩き始める。

その小さな足跡には、ぽつりぽつりと蜜の雫が落ちていた。

体験版はここまでです！

ここまで読んでくれてありがとうございました！